

氏名	須田 哲史		
学位の種類	博士(医学)		
学位記番号	第 573 号		
認定課程名	防衛医科大学校医学教育部医学研究科		
学位授与年月日	平成 30 年 2 月 15 日		
論文題目	局在関連てんかんにみられる不快気分症に関する研究		
審査担当専門委員	(主査)	福島県立医科 特任 大 学 教授	丹羽 真一
		杏林大学 教授	渡邊 卓
		順天堂大学 教授	青木 茂樹

審 査 の 結 果 の 要 旨

てんかん患者にはてんかん発作以外に様々な精神障害の併発が多く認められる。その一つとして発作間欠期不快気分症 (interictal dysphoric disorder, IDD) がてんかん特異的として提唱されている。IDD は易刺激性に抑うつ、不安、恐怖が入り混じる多形性の感情症状からなるものとされ、Mula らにより開発された IDD 質問紙票 (IDDI) によりその有無を判定できる。IDD についてはイタリアやドイツで調査され、患者の 17% に認められ、生活の質の低下や自殺リスクの増大をもたらすと警告されているが、日本では調査されていない。申請者は局在関連てんかん患者 128 名を対象に、MINI による構造化面接を網羅的に行い精神障害の有無を診断し、日本語版 IDDI により IDD の有無を判定し、WHOQOL26 により生活の質を、MINI-SM により自殺リスクの評価をおこなった。本研究は日本で最初の体系的な IDD の調査であり、IDD が生活の質や自殺リスクにおよぼす影響を調査した研究である。本研究によって対象となった局在関連てんかん患者の 19.5% に IDD が認められること、IDD を有する患者では全例に MINI により診断される何らかの精神障害が併発していること、IDD を有する患者では有しない患者に比べて WHOQOL26 による生活の質が有意に低く、MINI-SM による自殺リスクが有意に高いことが示された。また、IDD を有する患者は有しない患者に比べててんかん発症年齢が有意に若く、複雑部分発作の回数および抗てんかん薬の有害事象が有意に多く認められた。この結果から、わが国でも欧州の諸国と同程度に局在関連てんかん患者には IDD が認められ、その心理社会面に悪影響を及ぼしていると考えられること、とりわけ若年発症のてんかん患者で IDD に注意する必要があることが示された。IDD を有するてんかん患者では全例になんらかの精神障害が併発しており、自殺リスクの増大が認められることから、IDD を早期に発見するように注意を払うことが必要であり、それによって患者の心理社会的予後を改善できる可能性があることが示された。

この新たな知見は今後、てんかん患者の発作症状以外の精神的健康、心理社会的健康の

維持と増強に資するものと期待しうる。すなわち本研究の成果は、局在関連てんかん患者の病態の総合的な解明と治療向上に寄与することが期待される。よって、本論文の学術的価値は高く博士（医学）として合格と判断した。